

# 飛驒によせる三つのバラード (1977年作曲 桐韻会委嘱)



石田一志 (音楽評論家)

長澤勝俊さんは、初期の《子どものための組曲》(1964)、組曲《人形風土記》(1966)のような、新鮮であると同時にどこか郷愁を誘うような、ほのぼのとした語り口の合奏曲によって、自己の方向性と様式、とくに独特の管弦楽法を確立された。一見、そのスコアはカバレフスキーの教育用のピアノ曲のようなテクスチャで、心を動かす素朴さを示している。しかし、邦楽器の音色と味わいには特別な配慮があり、合奏の規模が大きくても、編楽器の種類が多くても、常に個々の楽器の個性や特色が鮮明なのが特徴であり魅力である。現代邦楽が広い支持を得るようになり、さまざまな演奏グループが活動している理由には、明らかに、このような長澤作品の特徴・魅力が大きな理由になっているといえる。

この作品は、昭和52年の桐韻会第12回定期演奏会のための委嘱作品で、同年4月12日に東京新宿の朝日生命ホールで初演された。編成は箏I、II、IIIと十七絃、尺八の五重奏曲であるが、今回はそれぞれのパートを増やして演奏される。

「飛驒はかつて幕府の天領として栄えたところですが、ここには今もまだ当時の手作りの文化が豊富に残っており、私たちがいつのまにか手放してしまった貴重なものをみることができます。飛驒に残る数多くのものの中から私が強く心に魅かれた三つを素材として取り上げ、組曲風にまとめたものです」という、作曲者の言葉のように、飛驒に残る手作り文化から、「歩荷(ほっか)」、「立円(たちつぶら)」、「杉玉(すぎだま)」が選ばれ、組曲を構成している。

## 1. 「歩荷(ほっか)」

歩荷とは、文字通り、背中に荷物を背負って徒歩で運搬すること、あるいはその運搬人を指している。とくに飛驒では、歩荷によって富山湾でとれた鰯を正月魚として、雪の江戸街道を、いくつもの峠を越えて信州に運んでいたことが有名である。

全体はABCBAのシンメトリックな構成で、後半の再現は短縮されている。十七絃に支えられ3パート

の箏が巧みに組み合わさったオスティナートがAの楽想で、歩荷の快活な足取りを描く。主題の提示のあと、いったん停止して、改めて歩みを力強く進めてゆく。その快活な調子に乗って尺八もオスティナートの輪郭を唱和する。やがて、箏の動きは激しさを加えてゆく。箏が静かな和声的な伴奏に入るとB部分。ここでは尺八から柔らかな表情の山の歌が流れる。ついで少し動きを増してクライマックスを形成するC部分に入る。ここでは十七絃の低音から尺八の高音までの音程と音色の対比が特徴である。やがてBの再現。ここでは以前の尺八の旋律が箏に移されている。さらに印象的なオスティナートのAが短く再現する。

## 2. 「立円(たちつぶら)」

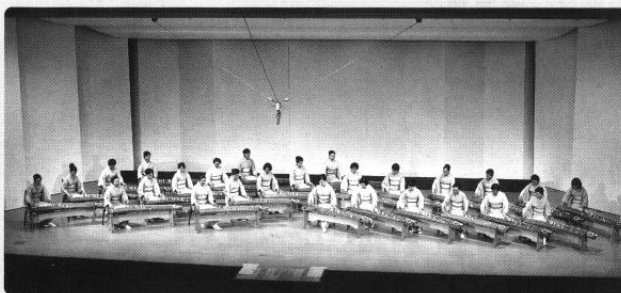
立円は、北陸・東北などに広がる乳幼児を立たせて遊ばせる保育器のこと。今日のベビーサークルである。

全体はABAの三部形式。Aの部分は穏やかな三拍子で、子守唄のようなやさしい表情の旋律が箏を中心に歌われる。四拍子のB部分は、少し息の長いフレーズの、美しい尺八の歌である。

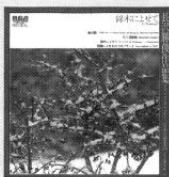
## 3. 「杉玉(すぎだま)」

いまや有名となった、造り酒屋の軒下に吊るされる、その年の新酒の出来上りを告げる杉の葉を束ねた球状の看板。地方によっては酒林、酒箒、酒旗などの別名もある。お祭りの気分の斬新なリズム感をもった、生き活きとしたフィナーレである。

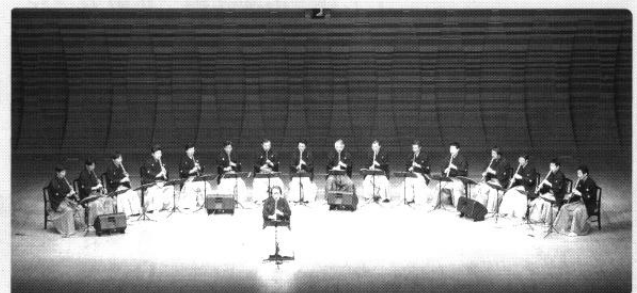
全体はやはりABAの三部形式。A部分は、5拍子のリズムが中心楽想。フォルティシモで不協和音も交えた、急テンポのアクセントの効いた楽想である。これを活かすよう、流れのある4拍子や3拍子の楽想が組み合わされる。中間部は、3拍子に乗った尺八の歌で、これが2回繰り返される。最後のAの再現は、コーダに相当するもので、弱奏から始まってフォルティシモに盛り上がり閉じる。



正派合奏団



「飛驒によせる三つのバラード」収録LP



山本邦山尺八合奏団



「飛驒によせる三つのバラード」収録CD